

一しきのめしの事 汁をかくるめしをばかきに入れて、本のめしのさきに置也、先本のめしをくいて汁をかくる時、かさのめしにひや汁をかけてくふ也、ひや汁もくみ付にしてすはりて有をまへには、すう事有べからず、めしにかくるまでなり、

〔伊勢守貞宗朝臣記〕飯に汁をかくる事

一本膳のさいを右の手にてのけて、扱食をわけて、しやうじんの汁をかけて、大汁ひや汁同前、但時の景物共にて、魚類共あらばそれをかけべし、賞翫の心歎、又汁をさいしん引間は、食をまいらすして、箸を取直し、汁のくる間待べし、

〔簇方明記〕四一食に汁懸候事は、冷汁を懸候て能なり、但時宜によるべし、珍敷物などならば、本汁懸候ても不苦也、

〔酌并記〕四一飯汁にさいしん引事、汁をかけて後は引事無用也、乍去所望有ては格別也、

〔よめむかへの事〕一きやうのせん、しるかけい、などまいり候、このとき、よめごと、とのご御いであひ候て、御とりかはしども候、しさいこれあり、

〔禮容筆粹〕七汁をかくるに節之事

飯に汁をかけ候事は、上客を見合する也、上客早く参り仕廻給は、各早く喰終るべし、貴人汁をかけ給ふを見て、皆々汁をかくる也、何れの汁にても賞翫の汁をかけ候べし、たとへば、椀中を三分一程にくひへらして、片はしに汁を卒度かけ、少づ、箸を以て汁にひたして喰べし、たくさんなる飯に上から汁をかけ、箸にて拌せ、椀中をよごし、四五分ならではよごさる箸を一二寸もよごし、あまさへ飯粒などの付たるを、横ぐわへにくわへて是をおとし、或ははしと箸とにてかすりおとしなどする體、誠に見苦し、小人などは汁をかけ給ふ事あし、

〔玉藥〕承久二年四月十六日、此日東宮

○仲

始聞食魚味

○中

次漬御飯於御汁物

二箸

奉含之

一盤

供也、居